

令和5年度あきる野市生涯学習シンポジウム実施報告書

あきる野市生涯学習コーディネーターの会

実施の概要

テーマ:「市民と協働で進める生涯学習 ～さらに活気のある市にむけて～」

実施日時:令和5年3月2日(土)午後0時半開場、午後1時～午後4時

場所:あきる野ルピア3階ルピアホール

基調講演、パネルディスカッションの2部構成で実施した。

出席者:65名(来賓6名、来場者:大人27名、子供9名、市:5名 会のスタッフ18名)

1. 開会前の連絡

12:55～

司会(小林)



ご来場の皆様にお知らせ致します。午後1時より「第15回あきる野市生涯学習シンポジウム」を開会いたしますのでご着席頂くようお願い致します。

ここで2つお願いを申し上げます。

会場内では、携帯電話の電源をお切りになるか、マナーモードにして頂きますようお願い致します。

基調講演とパネルディスカッションで手話通訳を行います。皆様のご理解とご協力宜しくお願い致します。また、記録のため、写真撮影とビデオ撮影を行います。個人が特定されるようなアングルでは撮影しないように努力しますので、ご了解ください。

なお、本日のシンポジウムの内容・出演者のプロフィールなどはご入場の際にお配りしました資料を参照して頂くようお願いいたします。

2. 開会の言葉

13:00～13:03

司会(小林)

皆様、大変お待たせ致しました。ただ今よりあきる野市教育委員会主催による、「第15回あきる野市生涯学習シンポジウム」を開会致します。

本日は、多数のご参加を頂きまして誠にありがとうございます。

司会を担当します私は、本日のシンポジウムの企画・運営をしております、あきる野市生涯学習コーディネーターの会の“小林里絵”です。宜しくお願い致します。

あきる野市生涯学習シンポジウムは、生涯学習推進計画「あきる野学びプラン4」における重点施策の

一つに位置づけられており、市の生涯学習の普及・啓発を目的に平成18年より実施しております。

本年度のシンポジウムは「市民と協働で進める生涯学習～さらに活気のある市に向けて～」をテーマとして、地域と行政の協働や世代を超えた絆を深める活動に積極的に取り組まれている市民団体の皆さんにその活動事例の紹介やパネルディスカッションを行って頂き、あきる野市における生涯学習推進について市民の皆さんと考え、理解を深めることを目的としております。

それでは、初めに主催者を代表しまして、あきる野市教育委員会教育長の丹治 ^{みつる} 充より開会のご挨拶を申し上げます。

13:03～13:08 主催者挨拶 あきる野市教育委員会教育長 丹治 充^{みつる}氏

丹治教育長:



皆様こんにちは。早春の訪れを感じる今日この頃です。本日は、お忙しい中、中島市長様を始め多くの皆様にご参加いただきました。有難うございます。主催者として一言ご挨拶を申し上げます。

皆様ご存知のようにあきる野市生涯学習シンポジウムはコロナ禍で4年間休みがありました。昨年度やっと開催でき、今年も引き続き開催の運びとなっております。ご参加の皆様には本日の開催を楽しみにされているのではないかと思います。

教育委員会では人生100年時代の超高齢化社会を見据えて新しい時代に対応した知の循環型社会の構築を推進しています。これを推進するための生涯学習コーディネーターの養成講座では、今年度第19期では新たに4名が誕生しました。合計141名が誕生しています。また教育基本計画第3次案では市民の皆様方の自主的な生涯学習を支援し、生涯を通じて学習できる環境づくり、すべての市民が心豊かに意欲的に学べる環境の整備、機会の提供に努めています。今日のシンポジウムのメインテーマは市民と協働で進める生涯学習、サブテーマはさらに活気のある市に向けてとなっています。地域と行政の協働、世代間での交流を深める推進に向けて、事例を通して地域づくりや町づくりについての発表や討議をしていただきます。

今回のシンポジウムには基調講演として株式会社けやき出版社の代表取締役の小崎奈央子さんに講演をお願いし、基調講演後のパネルディスカッションには高橋敏彦さん、末岡真理子さん、三瓶清憲さん、陶山愛嘉さんの4名の方をパネリストとしてお迎えしております。またコーディネーターとして拓殖大学の有馬廣實先生に、司会は拓殖大学の本庄美佳先生をお願いしています。活発な実りあるシンポジウムになるかと思っています。よろしくお願いいたします。

本日はさまざまな分野で活躍されています皆様のお考えをお聞かせいただき、あきる野市民が生き甲斐ややりがいを持って意欲的にこれから地域での活動に活かすことができますよう、そして生涯学習活動が活発に推進されることを祈念いたしまして挨拶いたします。本日はよろしくお願い致します。

3. 基調講演

13:08～13:10 司会(小林)

丹治教育長、ありがとうございました。

続きまして基調講演に移らせて頂きます。

株式会社けやき出版 代表取締役 ^{おぎき}小崎奈央子さんをご紹介します。

国立市生まれで、自動車雑誌や通信教育雑誌などの編集を経て、2008年立川市のけやき出版に入社され、企画出版の編集を担当した後、2014年に地域情報誌『たまら・び』の編集長に就任されています。

2015年に4代目代表取締役に就任され、出版社の枠にとらわれず、多摩エリアに関する多様な事業展開を目指し、2018年より東京都産業労働局の「インキュベーションHUB推進プロジェクト」に採択され、クリエイターを中心とした創業支援事業を開始されています。また2020年に多摩の仕事を特集する情報誌

『BALL.』(ボール)を創刊、編集長を務められ、2021年、多摩をコーディネートする「BALL.COMPANY」の新規事業を開始されています。

それでは宜しく願い致します。

13:10~13:50 株式会社けやき出版 代表取締役 ^{おぎき}小崎奈央子氏

演題 「まちと人がつながる編集の力」



(40分)パワーポイントを提示しながら講演。

ご紹介いただきました^{おぎき}小崎奈央子と申します。パワーポイントとお手元の配布資料を併用してお聞きいただけるとありがたいです。

本日は3つのことを軸にお話しさせていただきます。初めに、「けやき出版」のこと、二つ目にけやき出版が行っている「3つの事業」のこと、最後に、メインの“まちと人がつながる「編集の力」”のこと、をお話します。

1. けやき出版のこと

さて今日ご参加の方で、あきる野市民でいらっしゃるかはどのくらいいらっしゃいますか。私どもの「けやき出版」は多摩30市町村に特化した立川にある出版社です。

自己紹介は資料p2にありますのでご覧ください。私は28歳から雑誌編集の仕事をしており、30歳の時にけやき出版に入社しました。2015年(37歳)に、83歳を超す先代社長の後継者がおらず、私が4代目を引き継ぐことになりました。現在、編集と経営の両方の仕事をやっています。(会社概要を提示)

「けやき出版」をご存じですか？

「けやき出版」は今から44年前に、立川の名士が出資して起業し、多摩地域の事業や活動の紹介を目的に設立され、今日まで多摩の文化を発信してきました。東京の多摩エリアならではの魅力を、地域に住んでいる方々にはもちろん、多摩を知らない全国の人々にも発信しています。出版だけではなく、多摩の魅力を発信する事業もしております。

2015年に経営を引き継いでから、「多摩のまちとひとを繋いでいく」を経営理念としてきました。

多摩エリアの発展を会社の存在意義としていますから、出版物に留まらず地域の魅力につながる事業に積極的に取り組み、地域に愛される会社を目指しています。多摩エリアの発展について、「自分事として、思い入れを持つ」人を増やしていこう、私たちが人と人をつなぐ「ハブ」になろうとしています。それが「多摩のまちとひとを繋いでいく」ということになり、生涯学習にもつながります。

2. 出版・広告・拠点事業のこと

けやき出版の3つの事業として、出版事業、広告事業、拠点事業があります。出版事業、広告事業はいわば「ソフト」にあたり、「拠点事業」はいわば「器」を作る事業です。“本を作る”出版事業に加えて、私が社長になってから、広告事業、拠点事業に力を入れるようになっていきます。

まず、出版事業には①自費出版、②企画出版、③提携出版があります。

1) 自費出版は、自分の「好き」を本にまとめて形にする、多くの人に広めたい方のためにお手伝いする事業と言えます。例えば野鳥の本を出したいとか。

2) 企画出版は、当社企画による商業出版です。著者にオファーし、自社で企画から費用負担をします。
3) 「提携出版」(自費出版と企画出版を混ぜたもの)「多摩のまちとひとを繋いでいく」は資金調達の方法としてクラウドファンディングや補助金申請など多様な方法を用いています。「提携出版」では著者の知名度や予算不足などのリスクもあります。これらを総合的にやっています。

次に私たちの仕事である、広告事業、拠点事業についていくつかご紹介します。

広告事業の例として、「日野市市制施行60周年記念プロジェクト」があります。この事業では「記念誌」だけでなく、紙以外の情報発信を試み、利用したマンガから動画を作成したり、多くの市民が参加する市民参加型の企画としたり、集まった情報を「記念誌」に入れるなどの試みもしました。

また「多摩東京移管130周年プロジェクト」(神奈川県からの移管130周年の記念事業)では、記念誌プラス動画を作成し、その動画は事業のイベントに使わせていただくお手伝いをしました。

「拠点事業」は、おとし、立川南口の「コトリンク情報発信センター」(立川市と東京都の合同事業)の運営事業を担当しています。イベントの企画などを担当。この施設は、200名ほどの市民が参加する、市民参加型の活動を支援し、発信するためのものです。(様子を提示)

3. まちと人がつながる「編集」のこと

今会場に、生涯学習・地域活動をやっておられる方どのくらいいらっしゃいますか。(挙手多数)
では生涯学習をやりようと思っておられる方、では、そのような方へのメッセージとしてお話します。

私の原点は雑誌『たまら・び』です。これまでに21年間103号まで、1年に4回、80ページのボリュームで作ってきました。本紙の特徴は、編集者のみで作るのではなく、「市民と一緒に作る」を貫いたことです。市民とは、大学生や主婦、地域のいろいろな方々が30名ぐらい、多い時には50名ほどが参加して作られます。地域愛にあふれた方がたくさんいらっしゃり、驚きもし、教えられることが多いです。

企画から市民が入り、原稿も書いていただくことの難しさ、多方面に気を配る必要もありました。

一方で、地域の人たちが市民ライターとして参加する参加型編集制作を行い、シビックプライドの醸成やクリエイター創出の機会となったと考えています。出版社として、市民の地域への愛情を守りながら編集を続けてきました。『たまら・び』は多摩エリアに特化したライフマガジンとして制作されました。

この『たまら・び』を守らねばと経営も引き受けたということもあります。使命感を培われました。

また市民と編集をする中で、いただいた感想・評価のコメントに深く感銘を受け、そのコメントが次のアクションにつながるという経験もしました。これは市民がどう生涯学習、地域と関わるか、ということとつながると思います。市民が、仕事としてではなくボランティアとして編集を続けるというのは、モチベーションの維持が大変です。その原動力は3つあります。自己実現(やりたいことをやっているか)、自己成長、これが動く動機になります。しかし、自分のやりたいことをやるだけでは続きません。誰かのためだけに動いても「しんどく」なります。その時、「地域貢献」があります。役割として何をすればよいかという面があります。自分のやりたいことであり、地域のためになることでなければならぬ。そして「社会貢献」に最終的につながるのが正解なのではないでしょうか。

さらに自分の「好き」なこと、「得意」なことでないとは続きません。ボランティアは「やりたい」だけで関わるので、途中でいやになったり、「やりたい」が先行するとルールを守らないことも出てきます。弊害がでます。「やりたいー自己実現」と地域のためとが両立しないといけません。

自己実現の中で、「好きなこと」「得意なこと」を整理すること。「好きなこと」が「得意なこと」とは限りません。得意かどうか見定めないとうまくいきません。「得意」とは誰かに気付いてもらう、教えてもらうものです。

「他己評価」により自分の「得意」を知るという新しい発見があります。

編集という仕事についての経験から考えてみますと、私の場合「本が好き」、「文章を書くことが好き」ということから編集の仕事を選んだと言えます。経営者となってからは、今回のように人前で話す機会が増えました。私は、実は人前で話すのは苦手です。しかし、「人前で話す」依頼が来るのは、私が「話すことが評価されているから」と考えるようにしています。好きな編集もやり、講演など外に出る仕事もやります。

モチベーションの維持には、「好き」ということが大事ですが、「得意」ということをかけあわせることが大事です。この時、他の人から自分の「得意」を指摘していただいたり、他人から「求められ」、「自分はこれが得意なんだ」と新しい発見をするということが重要です。客観的に評価していただくことです。

女性をターゲットにした「#Tag magazine(ハッシュタグマガジン)」の例では、得意を活かすために、市民に企画をねり、プレゼンまでしていただく、編集部と、立川市が審査、出した企画を実現し、イベントなども実施していただきます。

3.1 現在制作している「BALL」について

例を挙げます。21年にわたり制作を行ってきた地域情報誌「たまら・び」は現在会員誌となっています。そこで、出版社として、情報誌を創刊することになりました。

「BALL」は、もっと自由に売る本として自社で発刊しました。自然と利便性が共存する多摩エリアだから、多摩(たま)エリアを「ボール」のようにはずんだり、飛び跳ねたり、遊び心をもって仕事に取り組むことが大事です。「職住近接」の発想、多摩地域を「都心へ通勤する人たちのベッドタウン」としてではなく、「働く場所」として魅力あるエリアだということを発信したかったのです。

丁度コロナ直前に創刊され、例えば「多摩エリアに住み都内で働く人が、自宅の近くで働こうと思い始めた人」などの「職住近接」なども考えてのことでした。「職住近接」の生活をしている人を取材しました。

コロナの影響でリモートワークが普及し、23区に通わないという選択肢が生まれました。多摩地域の枠にはまらない働き方を紹介するという編集方針をとりました。会社員やフリーランス(の別)に捉われないこれからの働き方を創ろうとする考え方です。働き方や人生を考える情報誌です。この情報誌は、地域の様々なクリエイターと協働で個の力を最大限活性化し、企画段階から作り上げてきました。紙媒体だけでなく、ウェブマガジンも作りしました

制作メンバーはフリーランスなど様々です。

地域でなにかやろうとする時に「コンセプト」と「ターゲット」を考えます。言い換えると、「誰のために何をやるのか」を決めることです。自己満足で終わらないためには、「地域貢献」が必要です。

私が「BALL」を立ち上げた時、30~40代のファミリー層、多摩地域に住んで、23区に職場がある方を主な読者層に設定して、どうやったら多摩を好きになってもらえるかと考えました。

ターゲットは30代のペルソナを設定(趣味嗜好を細かく)、その人が「この記事を読んでくれるか」などを考えました。

「この人が喜んでくれるか。」と考えると軸がぶれません。(地域活動では)「地域のため」の思いは個々

人でばらばらなので、「この人」のためになるかを「軸」として持ちます。

編集にあたって考えていること(コンセプト)は、「誰のために何をやるか」です。「自分がやりたいこと」から始めて地域貢献へと発展しますが、さらに社会貢献のターゲットは「活動の先にあるもの」ですが、本当に「誰のために」するのかを決める、仮の設定を行うことが重要となります。そうでないと、自己満足に陥ります。

編集は共同でやる上での難しさもあります。テーマを決める場合に皆の意見が一致しない。多数決では不満が出る場合も考えられます。地域のために活動したい、しかし、人により意見は違います。皆を一致させられないという時に、どうするか。それぞれが正解なので、無理に合わせる必要はないのです。出された意見すべてを取り込む、テーマを決めないことを編集の方針とすることをお願いしてきました。

無理に意見を合わせない、「折り合い」をつける、着地点を見つけるという方法があります。

8年前に『たまら・び』の編集長としてあきる野市取材して、編集をやって見て、あきる野市に魅力を感じました。丁度中島市長がまだ市長になる前の時です。「あきる野市に若い人を招き入れるにはどうしたらいいでしょうか」とお聞きしましたら、“外から来る人と中にいる人のパイプになる人が必要だ。自分がやりたい。昔からいる人がパイプ役になることで、両者が安心して頼れる”、ということでした。

あきる野市には自然も、観光資源もあり、新しい人や若い人が活躍する場もかなりあります。

(「たまら・び」の投影、説明「渓谷チェアリング」など 地元でないと紹介できない情報が大切。「瀬音の湯」 「移住者」)

たとえばあきる野市への移住者にお話を伺うことができました。“古民家に住みたいが紹介してくれないか”、と地域の人に話すと、“まずアパートを借りて、近所の人たちと仲良くなり、知り合いになる、信用していただくという関係をつくってから、一緒に古民家をさがして買ったら”といわれた、とのことでした。

あきる野市に限りませんが、「まち」へのかかわりを通して自分の住む地域への愛着心が生まれます。活動は「興味がある」「自分の好き」から入りますが、その活動がその人にとって「自分ごと」になれば続いていきます。参加の姿勢は人それぞれですが、「誰かがやってくれるだろう」と待ち、「自分が中心になるのはどうも」という方もありましよう。自分が始めることは少ないのですが、誰かと「一緒に走りたい」「伴走する存在に」なる、背中を押されて動くこと、背中を押す人も必要です。

会社の経営も社長に言われたからではなく、自分の「やりたい」こと、使命感があったから続いています。

「言い訳」を作らない。自分が決めたことは失敗したとしても許せる。言われてやったことは誰かのせいにしてしまいます。

ここで大切なことは、「だれかがやってくれるだろう」と人任せにすることではなく、編集を通して「伴走する存在に」なる、活動は自分が「やる」と決意し、まず第一歩を踏み出す、ということが大切です。

その一歩は皆さんが決めることです。頑張りすぎないことも大事です。

自分が楽しい事からスタートし、地域や社会のために貢献し、自分の幸せが皆の幸せにつながるということが生涯学習の基本であり、「市民と協働で進める生涯学習」につながるのではないのでしょうか。

30市町村ごとに構築した人とのつながりやネットワークを制作に活かしてきました。

ご清聴ありがとうございました。

13:50～ 司会(小林)

小崎さん、長時間に渡り大変貴重なお話をありがとうございました。
ご講演に対しまして会場の皆様、どうぞ盛大な拍手をお願い致します。
ありがとうございました。

ここで、次の準備の為、10分間の休憩とさせていただきます。

(なお、お車をあきる野ルピア提携駐車場を利用された方は時間割引がありますので、“駐車券”
をお持ちになり、ルピア窓口に申し出て頂くようお願い致します。)

13:50～14:00 休憩

4. パネルディスカッション・質疑・シンポジウムのまとめ

14:00～14:05 司会(小林)

お待たせいたしました。それではパネルディスカッションを始めさせていただきます。
今回パネルディスカッションにお招きしました皆様をご紹介致します。

(1) はじめに、高橋敏彦視覚デザイン研究室 高橋 敏彦さんです。

1942年 札幌の生まれで、高校生の頃、第1回札幌夏祭りを開催させるための告知ポスターの一般公募があり、高橋さんのデザインが特選に選ばれ、全国の主な駅に貼りだすための印刷物になったのが、デザイナーを志すきっかけになられたそうです。

上京され、渋谷にある桑沢デザイン研究所を卒業され、1975年(昭和50年)、当地 五日市の溪谷に近い地に越してこられました。町の観光ポスター、五日市映画祭立ち上げなど、あきる野市の観光事業をはじめ地域の活性化に長年貢献されてきました。

(2) NPO職員、「10代サードプレイス100日荘」運営の末岡 真理子さんを紹介します。

NPO法人全国子ども食堂支援センター・「むすびえの」プロジェクト・リーダーをされ、2019年2月から渋谷区教育委員会からの委嘱で3年間、全国初、コミュニティスクール地域学校総合コーディネーターに従事されました。「五日市まちづくり通信」市民記者、五日市活性化委員をされ、2020年からあきる野市と渋谷区で二拠点生活を始められ、2022年に本格的に移住されました。2023年9月から「10代サードプレイス100日荘」の運営をされています。中学2年生と年長の2児のお母さんです。

(3) 次に、あきる野青年会議所 理事長の^{きんべい}三瓶 ^{きよのり}清憲さんを紹介します。

18年前就職を機にあきる野に移住し、2017年より鍼灸師として転職を機に開業され、地域をより良くする為に活動されています。あきる野青年会議所に参加され、多くの事業に関わり、2024年度は理事長の職に就かれ、メンバーと共に明るい豊かな社会を目指して活動されています。奥さんとお子さん二人(ふたり)の4人家族です。

(4) 続きまして あきる野市国際化推進青年の会の ^{たけやま}陶山 愛嘉さんを紹介します。

2017年にあきる野市の姉妹都市であります、アメリカマサチューセッツ州マールボロウ市への海外派遣事業に参加され、またマールボロウ市の生徒のホストファミリーも経験されています。現在、あきる野

市国際化推進青年の会の一員として派遣事業のサポートをされています。大学1年生です。

(5) また、今回のパネルディスカッションの司会・進行を担当されます拓殖大学非常勤講師の本庄美佳先生を紹介いたします。東京大学文学部社会心理学専修課程を卒業され、ご専門は社会心理学です。民間シンクタンク、民間企業での勤務を経て、2020年に早期退職。現在は生涯学習、キャリア、労務、ファイナンシャル・プランニングの領域のコンサルタントとしても活動されています。あきる野市では、生涯学習コーディネーター養成講座の講師をお願いしています。

(6) 最後に、今回のパネルディスカッションのコーディネーターをお願いしました拓殖大学名誉教授のありま ひろみ有馬 廣實先生をご紹介します。同大学にて社会教育・生涯学習科目・学校教育科目などを担当され退職後、八王子市教育委員会事業として「生涯学習事業」の講師、「生涯学習・学習支援委員会」委員・アドバイザー他多数の役職と関連する著書、論文を発表されています。

あきる野市では、生涯学習コーディネーター養成講座の講師として、生涯学習推進事業全般に渡りご指導を頂いています。

パネルディスカッション 司会;本庄先生、コーディネーター有馬先生

14:05～14:10



【司会(本庄)】 パネルディスカッションの開始にあたってのコメント
パネルディスカッションの司会を務めさせていただきます本庄と申します。よろしくお願ひします。質問票の提出は、総合司会の小林さんにお願ひします。
先ほどの基調講演を受けまして、ここからは、「市民と協働で進める生涯学習～さらに活気のある市に向けて～」をテーマに、パネルディスカッションを進めてまいりたいと思います。それではコーディネーターの有馬先生、よろしくお願ひいたします。

14:10～14:50 【A ブロック】 コーディネーター・各パネリストから最初のコメント (約 40 分)

コーディネーター(有馬先生) 3分



皆様、こんにちは。本日のディスカッションのコーディネーターを務める有馬と申します。

先ほどの基調講演では、様々な示唆に富むお話をいただきました。小崎さんから企業理念として「多摩のまちとひとつをつないでいく」、経営基本方針として、
①地域の魅力につながる事業に積極的に取り組み、地域に愛される会社を目指す、
②多摩に住む人たちが自分のまちに誇りを持てるような仕事にチャレンジし続ける、
③多摩エリアの魅力为全国の人々に発信していく、とのお話がありました。

小崎さんのけやき出版は、多摩への愛情に満ち、住んでいる地域の人々が愛着と誇りを持てるような取り組みを続けておられます。深く敬意を表すべきことと思います。

私も、けやき出版の「たまら・び」あきる野市特集号をよみました。たいへん参考になりました。

講演の最後に、まちへの関りを通して自分の住む地域への愛着が生まれる、とのお話がありました。まさに至言だと思います。今回のシンポジウムの主旨にぴったりです。

それを受けまして、パネルディスカッションでは、4人のパネリストとともに、「市民と協働で進める生涯学習～さらに活気のある市に向けて～」について、考えていきたいと思っています。

まずは、パネリストの皆さんがどのような活動をされていらっしゃるか、お話を伺いたと思います。陶山さん、三瓶さん、末岡さん、高橋さんの順番によろしく願いいたします。

パネリストの発表

1 マールボロウ市との交流事業 あきる野市国際化推進青年の会 陶山 愛嘉

※プロフィール:2017年にマールボロウ市に派遣、受け入れを経験。

現在は、あきる野市国際化推進青年の会の一員として活動



あきる野市国際化推進青年の会の陶山愛嘉です。よろしく願いします。

2017年にあきる野市の国際姉妹都市である、アメリカ合衆国のマサチューセッツ州マールボロウ市への海外派遣事業に参加させていただきました。また、マールボロウ市から来た生徒のホストファミリーも経験しました。

現在は「あきる野市国際化推進青年の会」のメンバーとして、派遣事業や受け入れ事業等のお手伝いをさせていただいています。現在大学一年生です。

*パワーポイントで、活動の様子など紹介

1) あきる野市国際化推進青年の会

まず初めに、青年の会についてご紹介させていただきたいと思います。

「あきる野市国際化推進青年の会」は、派遣事業に参加したメンバーを中心に構成され、現在44人が在籍しています。写真は、2017年の産業祭での活動の紹介です。毎年産業祭で派遣事業の紹介をしています。

2) マールボロウ市との交流事業

1998年にあきる野市がアメリカ合衆国のマサチューセッツ州マールボロウ市と国際姉妹都市の提携をしてから、24回派遣事業が行われ、計163名の中学生が参加してきました。

マールボロウ市はマサチューセッツ州ボストンの西約45kmに位置し、ちょうど東京都心とあきる野市の位置関係に似ています。紹介写真

マールボロウ市はあきる野市と同じく豊かな自然環境に恵まれていて、北海道の襟裳岬(えりもみさき)と同じくらいの緯度のため、冬にはたくさん雪が降ります。写真は私の派遣の時の市内見学の時のものです。

3) あきる野市国際化推進青年の会の活動

青年の会の活動といたしましては、派遣事業の随行や、受け入れ事業や派遣事業の際、市役所の説明会に参加して経験談をお話したり、事前研修等のお手伝いをしています。

そして派遣の際や受け入れの際に中学生でも使える英語を使った英会話集の作成をし、配布しています。

・写真はマールボロウ市への派遣事業の市における説明会の時の様子です。

また、たくさんの方々にマールボロウ市との交流活動を知っていただくためにパネル展や、派遣事業や受け入れ事業の感想を写真付きでまとめた「M&A通信」(写真提示)を発行しています。

そのほかにも、この交流事業を広めるためFacebookやInstagramの運営を行っています。

マールボロウ市との交流を一人でも多くの方に興味を持っていただけたら嬉しいです。よろしく願いします。

※プロフィール

家族 妻・子供 2 名(男の子)

職業 鍼灸師(2017 年～)



18 年前就職を機にあきる野に移住し、鍼灸師として転職を機に開業し、地域をより良くする為に活動しています。あきる野青年会議所を紹介していただき、多くの事業に関わり、2024年度理事長の職を預かりメンバーと共に明るい豊かな社会を目指しています。鍼灸師、栄養士をしております。あまり人前で話すのは得意ではありませんがよろしくお願いします。

あきる野青年会議所の活動内容を紹介します。

青年会議所をご存じの方がどのくらいおられるだろうかと思います。青年会議所は全国に 690 カ所存在し、メンバーは30000人弱います。支部のような形で活動し、東京支部には1200人、あきる野市では32名います。活動エリアはあきる野市、日の出町、檜原村です。20 歳～40 歳までの会員が日々「地域の課題」解決のため切磋琢磨し自分を磨いています。明るい豊かな社会を目指し、それぞれが住む地域の課題を調査、研究、実施、検証を行いより良い社会を目指しています。過去の青年会議所の活動例を一つあげますと、

夕方の子どもの事故の多さを防ぐための対策を考えた事例があります。夕方は見えにくいという課題があり、ランドセルに「黄色のカバー」をかけることを発案しました。子どもの姿を見えやすくして、事故防止の対策としたわけです。みなさんもお気づきのように、現在この対応は全国に広がっています。

次に私たちのあきる野青年会議所の活動についてお話します。

活動の特徴は、毎年理事長が替わります。この町で何ができるかを考えた時、子どもに夢を与えることが大事です。以下お話します。

1) わんぱく相撲について

わんぱく相撲は約 50 年前に子供たちにスポーツの機会を提供するため、さらに心身の成長を促すために始まりました。今年度はあきる野でも行います。上記の内容に加え、地域の大人との交流の機会を創出したいと思っています。大人もともに事業を創る姿を見せたいのです。

就職や進学などにより、地域から子供たちが離れて行ってしまっているのが現状ですが、この街に戻りたいと思ってほしい。その時に、地域の大人が共に楽しんでいたという記憶が大事で、街の大人が楽しそうにしていない街に帰ってくることはないと思います。

だからこそ、わんぱくを大人が楽しく開催することで子供たちの心身の成長やチャレンジすることの大切さを学んでもらいます。

2) 秋川流域花火大会について

夏にはたくさんの方が訪れるあきる野ですが、冬には風物詩があまりなく観光客が少なくなってしまう。そのため冬の風物詩を作りたいと秋川流域花火大会が始まりました。秋川に来るきっかけになればと思います。地域の方にも活動に参加していただき、行事を創っていきたいと考えています。

コロナ渦でも花火を見た人が少しでも上を向いてもらい、明日の生きる活力してもらえよう、また成

人式を行えなかった世代を招待してのシークレット花火として続けてきました。昨年からは NPO 法人(まちづくりコンソーシアム)を立ち上げていただき、西多摩一番の花火大会にしたいと思っています。

3 NPO 職員、10代サードプレイス 100日荘運営 末岡真理子

※プロフィール:・10代を中心としたサードプレイス 100日荘運営



・認定 NPO 法人全国子ども食堂支援センター・むすびえプロジェクト・リーダー

・2016年から渋谷区恵比寿で恵比寿じもと食堂主宰

・五日市まちづくり通信市民記者

・五日市活性化委員

・中学2年生と年長の2児の母

・2020年からあきる野市と渋谷区で二拠点生活を始め、2022年に本格的に移住

前職:2019年2月から3年間、全国初、コミュニティスクール

地域学校総合コーディネーターに従事(渋谷区教育委員会からの委嘱)

「100日荘」を運営しております 末岡真理子です。(パワーポイントで説明) 司会からの紹介をいただいたので、自己紹介は省略します。

あきる野市の五日市地区で「10代サードプレイス」の「百日荘」を運営しています。年間100日の運営となります。新しいことだけでなく、(地域で)伝えられてきた懐かしいことも入れて、ごちゃまぜにして運営しています。

100日荘の紹介写真(テーブル兼用卓球台が道に面してある) 道ばたの延長の感覚で過ごせる雰囲気レイアウトしています。宿題や勉強をしたり、ゲームをしたり、食事も周囲の商店で買ってきてできるように、多様な場を可能とするために、「場」を定義しない形で運営しています。

多様な場のあり方として、1階は土間に続いて和室と台所があり、2階は私設図書室「100日荘文庫」(2階 登録制で使える)といった具合に、一つの建物の中にいろいろなものを混在させる形を取って、模索しています。登校できない子供(中高生)たちが利用できる「100日荘文庫」により、摂食障害などの本も置いて、フリースクールの場としたりしています。

また、防災拠点、「まちづくりカフェ的機能」など、多様な側面があります。空き家の再生の機会をつくる空き家(店舗)問題対策や地域の交流拠点、(自分ごととして地域のことを考えてもらう)、社会的孤立の解消、月2回の「子ども食堂」をきっかけとして、こどもの居場所づくり(食をルーツに多世代がゆるやかにつながり、サポートしあう)、体験格差の解消(子どもが多様な大人と関われる機会)をめざし、活動しています。(一場面として、地域の高齢者がこどもと交流する写真を提示)

地域のエコシステム、食品ロス削減への取り組み、若者の生活困窮支援の機能を持たせる場の提供も始めています。小さな冷蔵庫を置いて、「一畳でできる取り組み」「一畳フリッジ(公共冷蔵庫の発想)」も試みています。

現状のニーズ

貧困対策だけでなく、社会的孤立を防ぎたい。

人とのつながりにより変わっていくという手法です。

*主に資料21から32まで、活動の様子を紹介したパワーポイント資料を用いて説明。

4 安住の地あきる野

高橋 敏彦（高橋敏彦視覚デザイン研究室）

※プロフィール

・1942年 札幌生まれ

・絵画・書など芸術関係に関心があり、幼い頃から 美術館や図書館に通いました。



・高校生の頃、第一回札幌夏祭りを開催させるための告知ポスターの一般公募があり、私のデザインが選ばれ(特選)、全国の主な駅に貼りだすための印刷物になったのが、デザイナーを志すきっかけになったようです。

・上京し、渋谷にある桑沢デザイン研究所に入学(1963年)し、私が希望していた日本一の先生に学ぶことができました。(デザイナー 田中一光氏)

・卒業して数年経ってから、同研究所で講師を6年間務め、この間、自分の事務所を立ち上げ、このころから建築・映画・音楽など総合的に学ぶことにしました。

50年前に渋谷から五日市の乙津に移住してきました。35歳でした。

或る時、大悲願寺にスケッチに来ました。仁王像に目を引かれました。過去に奈良などで仁王像は見ていましたが、それなのにこの仁王門は自分の庭にある門のような気持になりました。また迦陵頻伽(がりょうびんが)の絵や彫刻も目にとまり、夢中でスケッチするという体験をしました。

五日市町役場から、観光ポスターを依頼され、作成し、日本観光ポスターコンクールに応募しましたところ、うれしいことに入選しました。3年目の応募で、4枚組の「秋川渓谷」ポスターが実は日本一になりました。大手の広告会社のチームが作成したのが多い時代に、五日市という地域の個人が、東京はもとより五日市町が受賞するということは今までになかったことでした。東京駅や立川駅、五日市駅長さんからもお祝いの言葉をいただきました。こうしたことは五日市に越してきたからできたことでした。

そうしましたら、その金賞の五日市のポスターが欲しいという依頼が全国からあり、翌年日本観光協会から5年連続でキャンペーン用ポスターのデザイン依頼をいただき、全国のJRや私鉄・地下鉄の駅に配布されるというこれまでにないうれしいことになりました。

北海道から上京し、渋谷にある桑沢デザイン研究所に入学でき、私が希望していた日本一の先生に学ぶことができましたが、この先生のおかげです。その後、自然のある場所に住みたい、自然のあるところで仕事をしたいという思いが強くなり、新宿を起点に住む場所を1年半探してきました。そしてこの地と出会いました。

あれから50年たちましたが、ここへきて救われた、安住の地をみつけた思いです。子どもも素直で元気に育ちました。ポスターの話をしてきましたが、「映画祭」も立ち上げて、「ふるさと工房」、「瀬音の湯」の立ち上げに参加したり、市からデザインの相談いただきました。商工会からも「ヨルイチ」の立ち上げ、「道の駅」計画で相談を受けたりしてきました。これからもデザインなどの仕事でお役に立てることがあれば、協力していきたいと考えています。

3つのキーワードについて、ディスカッション

14:50～15:20 【Bブロック】 (約30分)

① キーワード「こどもの居場所」 有馬先生→陶山さん→三瓶さん→末岡さん

(有馬先生) パネリストの皆さん、ありがとうございました。皆さんのお話を伺いまして、私は、3つのキーワードがあると感じました。次に特に「こどもの居場所」「自然の豊かさ」すべてに関わるのは「交流」、この3つです。ここでは、そのキーワードを軸にディスカッションを進めてまいりたいと思います。まずは、「こどもの居場所」についてです。

陶山さん、三瓶さん、末岡さんの順番にコメントをお願いします。

陶山;「居場所」ということでは、マールボロウとの交流で「居場所」を見つけた人も多く、留学、語学などのきっかけになった人もいます。

三瓶; 私たちの事業はこども対象の事業が多く、その取り組みが「こどもの居場所」につながります。実施した「こども相撲」も、また、過去に実施した「100キロの旅」というイベントでは、1週間、大変な経験を通し、日常の生活を見直すきっかけにしてもらいました。100日荘の取り組みは重要で大変興味をもちました。私たちの会は多様な職業の会員が活動しています。協力により、地域のつながりが実現でき、有効だと思いました。

末岡 渋谷区で「こどもの居場所」に8年ほど係わり、当時来ていた子は高校生になりました。大人の発想で「居場所」をつくると、来なくなる子ができます。自分には当てはまらないと感じる子が出てきます。10代の居場所というと、子供がどこにでもいられる環境が必要です。それでは「100日荘」があれば、それでいいかという、そうではなく、多様な場が必要です。市民活動の自発性の面からも、市民に限らず、さまざまな「プレイス」がある、創ることができる、のが大事です。

② キーワード「自然の豊かさ」

有馬先生:高橋さん→末岡さん→三瓶さんという順番でコメントをお願いします。

(高橋氏 五日市の自然の風景、入賞したポスター、最近のポスター、映画祭・ヨルイチ・(西の風、秋川溪谷。五日市物語、瀬音の湯)の題字、ガレリアきらり市のポスター、秋川溪谷・あきる野の匠のポスター、私設工芸学校ワッサー、青木平での染色布の洗い風景、スウェーデンの工芸学校の写真、広場での大勢家族の会食などを示す)

高橋;自然の豊かな五日市に、スウェーデンにあるような工芸学校を開設できないかと思い、(染色を指導したりした場面、スウェーデンの工芸学校の例(製作の場面)を示し)、このような学校ができればいいなと思うと同時に、(レストラン前の広場での大勢の会食風景を示し)五日市でもこのように近所の人が庭で大勢集まって、会食するというイメージの関係を作れないか、そのようなことができればいいなと感じています。自然をどうみるか、個々人の考え方もあります。

末岡; 自然の豊かさについては、渋谷とこちらを往復した経験がありますが、自然の豊かさを強く感じます。

自然の中に帰るとほっとします。子どもの自死のニュースなど、子供が生きにくい社会と感じています。あきる野市では、ほっとします。今一緒に考えてくれる方がこんなにいらっしゃることは非常にありがたい。

三瓶 ;自然の豊かさは魅力です。田舎なら自然は多い。秋川流域が東京都にあることが魅力です。都心から1時間程度に自然があること、そこに、迎えてくれる人がいる、それを発信していくことが必要です。

キーワード「交流」

有馬先生→陶山さん→三瓶さん→末岡さん→高橋さん

(有馬先生) ありがとうございます。では 3 番目、「交流」についてです。陶山さん、三瓶さん、末岡さん、高橋さんの順番にコメントをお願いします。

陶山さん→三瓶さん→末岡さん→高橋さん

陶山; 小学生、中高生の世代間交流が難しい。部活動、勉強で忙しく、世代間交流のチャンスがないと感じています。学校、マールボロウとの交流も多くの方に知っていただきたい。

三瓶; 「こどもの居場所」の時にも申しましたが、「こども相撲」など、多くの事業を発信し、多くの方に知っていただく。その中で子どもと大人の交流が出来てきました。今年は中高生を参加・運営、ボランティアで募集する予定です。かつての地域で近所の「お兄ちゃんやお姉ちゃんがこどもを遊びにつれていった」ようなイメージで、この事業を世代間の交流として、取り組みたい。社会が出来なければ、地域でやっていきたい。この発信が大切です。

末岡; 交流の機会をつくることも大事ですが、地域に場があること、非日常ではなく、つながりができることが大切ではないでしょうか。人との交流でつながりができる、「場」があることも大事です。そのような仕掛けづくりをめざします。

公的なサポートにひっかからない子ども達が、市民の協働でつながる交流のしかけを創りたいと考えています。

高橋 ; ステージで若い人たちが、演奏や活動発信をするために簡易に利用できる場所が欲しいと思ってきました。若い人が集まってくる場、利用できる所(防音装置や編集ができる場)が必要では、とずっと考えてきました。きららホールのようなプロのための施設とは別に、また市内の若い人だけでなく、市外をふくめて若い人があつまる場が必要です。

合併後、市がまだ一つのものになっていません。旧秋川地区の大きな図書館、ホール、ホテル、大型店舗という都市型ゾーンと、五日市地区は林間ゾーンとしてのそれぞれの魅力があります。五日市地区では、水辺に大型の野外劇場、小型のホテル、レストランなど魅力的な人々の発信、交流の場が欲しいと思います。そこに若い人も参加できるようにできないでしょうか。

(有馬先生) 有益な話ありがとうございました。いろいろとご意見ができましたね。

15:20~15:35

【司会(本庄)】 基調講演者の小崎さんからパネリストへの意見、質問をお願いします。

(小崎) 興味深くうかがいました。

二つキーワードを質問します。皆さんご自身の「きっかけ」「活動の動機」は何ですか。高橋さんは活動の場をここにしたのは何故ですか? 仲間を増やす、同じ志を持つ人を見つけるにはどうすればよいでしょうか。どんな伝達方法をとるのか皆さんの活動のやり方の違いもあろうかと思しますので、伝達方法をうかがってみたいと思います。

最初のきっかけはなんでしょうか。

【司会(本庄)】;今の「きっかけ」「活動の動機」という二つのキーワードをいわば宿題としていただいた感じですが、パネルディスカッションで終わるわけではなく、パネラーの皆さんの活動は続いて行きますので、フロアからの質問にもお答えください。

フロアから末岡さんへ

質問1 「100日荘」の 活動はいつですか？

末岡; 平日 10 時から5時まで、100日やっています。登校していない子ども達のために日中開いています。

午後4時から7時も開けたいが、子どもの保育の関係で、現状はこの時間になっています。

質問2 こども食堂はいつ開いていますか。

末岡; 月2回金曜日4時から7時でやっています。

質問2; 「100日荘」の 活動は、児童館などの公的な機能とかぶる内容もあるのでは、

末岡; どちらかというより、オルタナティブな選択肢が大切です。児童館などの公的な施設は、行政が利用者をラベリングしての利用になるのではないのでしょうか。市内、年齢、年収などでラベリングするのが、使える人を限定してサービスを設定するのが行政ですが、だれでも使えること、誰に対しても「どうぞ」と言えることが、100日荘の特徴と思います。

質問3; パネラー各位の、「生涯学習」は広いことばだが、「生涯学習」のイメージを教えてください。できるだけ一言をお願いします。「私にとって生涯学習とは」ということで、お願いします。

三瓶…全く思い浮かばない。

高橋; 難しい質問です。有馬先生から、以前、「若者対象だけでなく、年配の方への配慮を」と言われたことがありました。大事だが接点が思いつきませんが、今日は高齢者だけでなく、若い参加者も多い。年配の方の心配をしなくてよいです。

五日市へ越してきたきっかけですが、定山溪の近くで育ちましたが、美しい溪谷でした。近くに住みたいと思っていましたが、溪谷に住みたいという希望があきる野で叶えられました。この地の方が魅力があります。

【司会(本庄)】; 先ほどの小崎さんの質問、活動の「きっかけ」についてはどうですか？

末岡 ; 「生涯学習」というと小崎さんがさっきおっしゃったように、得意なこと、好きなことというのがそれだと思います。例えば「子ども食堂」でも、料理ができなくともできることが多いのです。会計、買い出し、広報など、料理以外に役割があります。各人の得意なことが集まり、1 回の活動ができる。その積み重ねです。好き、得意から入ります。私は、きっかけは「子ども」が好きから入ってもよい。何が好きで、何が得意かをつきつめ、活かせばよいと思います。

私の場合「子ども、子どもの世界」が好きということがあり、得意なのは見切り発車です。なんとかする、始めるということ、だと思えます。

三瓶; 入会のきっかけと言え、2017年にゼロリンピックという企画をしたことがあります。栄養士だったので、「ゼロリンピック」はあきる野市の給食の残り食をなくしたいという運動でした。小学1年、小学校4から5年を対象に、1 週間「食育」をする。栄養士としてかかわりました。多様な仕事を持つ市民が夜中まで話し合ったという経験をしました。本気で考えました、その熱心さに感銘を受けました。素晴らしいと思いました。それがきっかけでした。

陶山 ; マールボロウ派遣に参加するきっかけは、兄、姉が経験しており、兄姉が参加して知っていたことがきっかけになりました。経験談も聞きました。受け入れの経験もありました。多くの経験をさせていただき、会としては、活動を紹介したパネルを中学校や市役所で展示させていただき、市民に紹介してきました。

質問4;「市民と市民または行政の協働とはどういうことか」

【司会(本庄)】:参加者の皆さんからご質問をいただき、全てではありませんが、パネラーの方々に答えていただけ、よかったですと思います。この質問は、パネルディスカッションで取り上げる予定です。有馬先生から、市の行政との協働について話していただこうと思っていました。

15:35~15:50 【C ブロック】 市(行政)との協働について、各パネリスト・コーディネーターからコメント(約15分)

(有馬先生) さて、パネルディスカッションも終盤となりました。最後に、パネリストの皆さんから、「行政との協働」、「市(行政)への要望」について、一言いただければと思います。陶山さん、三瓶さん、末岡さん、高橋さんの順番でお願いします。「協働とは何か」という先ほどのご質問についてもお考えがあれば、お願いします。

陶山さん; 市(行政)への要望

マールボロウ参加の生徒とマールボロウ市民との交流は今も続きますが、違う世代、興味はあるが参加していない方、他の市民に広げたいと思っています。興味のある方に派遣事業を知らせたい。派遣経験者は、市民とマールボロウとをつなげることができるのではと思っています。マールボロウ参加の経験を活かし、ホームステイなどに広げたいです

三瓶さん; 市(行政)への要望は、花火大会など、行事についてご協力いただいているので、特に要望はありません。教育委員会始め、皆様にご協力いただいていますので。要望といえば、私たちは夜、議案を作り、月1回で会議をしています。市民の皆様が私たちの活動へ理解をしていただき、駐車場の利用とかご協力をいただければありがたい。話だけでも聞いていただければと思います。経験不足もありますが、よろしくをお願いします。

末岡さん; 市(行政)への要望:対話ができる市だと思っています。市民活動への理解はしていただいています。「百日荘」へ)こどもが行きたがっても、親が不安に思い、反対だという例もありますので、「大丈夫な施設だ」ということを言ってもらえるとありがたいです。短い活動期間で認めてもらうのは難しいです。市の担当者などから、私たちの活動に対して「大丈夫」と言ってほしい。子どもの時の時間の過ごし方は大事で、対話が大切 ***この部分騒がしく聞き取れない**

高橋 行政へ:「ふるさと工房」の見直し、「新たな魅力づけ」を考えてほしい。工芸学校のような(染織・木工・陶芸・ガラス工芸 など)寮制などが考えられます。地域に下宿などして、高齢者と助け合って生活するようなことができれば、地域の過疎化、高齢化の現状にも対策になります。「ふるさと工房」の改築など、施設の見直しをして欲しい。若い世代の来場を促す施設の拡充をお願いします。あきる野映画祭に代わるイベントを創設できないでしょうか。

③ コーディネーター(有馬先生) 全体まとめ 5分

(有馬先生) ありがとうございます。

コーディネーターとして感想を述べたいと思います。

今回のシンポジウムのメインテーマは、「市民と協働で進める生涯学習」—さらに活気のある市にむけて—ですが、これを発展させるには、社会的活気、即ち産業の発展、教育・医療・福祉の充実等も欠かせません。それをどのようにして実現するか、その方策を探求すること、これも生涯学習そのものです。

日々の生活の中で、生きる喜びを感じ取り、暮らしていく。生涯学習はそれ自体が目的ではなく、あくま

で、人々が心豊かに生き、充実した生活を送り、社会貢献をするための方策を考え、実行する手段です。今回のシンポジウムのメインテーマにありますように、あきる野市を、さらに活気のある市に向けて発展させるには、市民の活気、即ち市民一人ひとりが心豊かな、充実した生活をしていく、私たちとしては、そのような「心豊かに生きる」ための生涯学習の在り方を、特に気負うことなく探求し、実践していけば良いと思います。そして市民がそのように楽しく、充実して、心豊かに生きることができれば、それはロール・モデルとして、若い人々に好ましい影響を与え、あきる野市を自らの心のふるさと、生きる場として肯定的に評価し、自らもそのような生き方をしたいという青少年が増えていくのではないのでしょうか。

今回のシンポジウムでは、4人のパネラーの方々が、それぞれの立場から有益な提案をされています。それらの提案を市民と行政が協働して実現するように努めること、それが、さらに活気のある市に向けて発展させることの基本だと考えられます。

「協働」とは 仲間と協力して対話をして、一緒に考えながら、働く。一緒に汗を流して成し遂げていくことです。

私も本日のコーディネーターとして、本シンポジウムのレジュメのまとめの中で、幾つかの提案を表明してあります。やや長い嫌いはありますが、自分なりに重要だと考えることを述べました。要は、人、モノ、情報が動き、交流し、まちの活気を上昇させることです。それが生涯学習の振興につながります。どうぞお読みください。

15:50～15:55 【司会(本庄)】

有馬先生、パネリストの皆様、活発なパネルディスカッションをどうもありがとうございました。・フロアから質問してくださった方々、ありがとうございました。話しをすることで、自分の考えをまとめていくことができます。皆さんが「生涯学習」はすぐ答を出すものではなく、日々の活動の中で考えていただけたらありがたい、と考えています。

6. 閉会挨拶

15:55～ 総合司会(小林)

アンケートのご協力をお願いします。

それでは、あきる野市生涯学習コーディネーターの会の溝口会長より閉会のご挨拶を申し上げます。

～15:59 生涯学習コーディネーターの会(溝口会長)

本日、参加されました会場の皆様、パネリストの皆様、ご意見をいただきありがとうございました。大変参考になりました。今回はパネリスト4名で構成しました。司会の本庄先生、コーディネーターの有馬先生、長時間に渡りありがとうございました。本日、ご登壇頂きました皆様に対しまして今一度大きな拍手をお願いします。(拍手) ありがとうございました。

今後ともあきる野市生涯学習推進活動へのご支援・ご協力をお願いします、閉会とします。

ありがとうございました。

～16:00 総合司会(小林)

本日は長時間にわたり誠にありがとうございました。



以上

第15回 あきる野市生涯学習シンポジウム

「市民と協働で進める生涯学習」

～さらに活気のある市にむけて～

地域と行政の協働や世代を超えた絆を深める活動などの事例から、
地域づくりやまちづくりにおける生涯学習について
市民の皆さんと考えます。

参加費

無料

《日時》

令和6年

3月2日(土)

午後1時～4時

(開場 12時30分)

《場所》

あきる野ルピア 3階
ルピアホール

定員

150名
(当日受付)

《手話通訳》

基調講演と
パネルディスカッションでは
手話通訳を行います。



小崎奈央子さん



高橋敏彦さん



末岡真理子さん



三瓶清憲さん



陶山愛嘉さん



有馬廣實さん

《 基調講演 》

小崎(おざき)奈央子(株式会社けやき出版 代表取締役)

演題 “まちと人がつながる「編集の力」”

《パネルディスカッション》

●パネリスト●

高橋 敏彦さん(高橋敏彦視覚デザイン研究室)

末岡 真理子さん(NPO 職員、10代サードプレイス100日荘運営)

三瓶 清憲(さんぺいきよのり)さん(あきる野青年会議所 理事長)

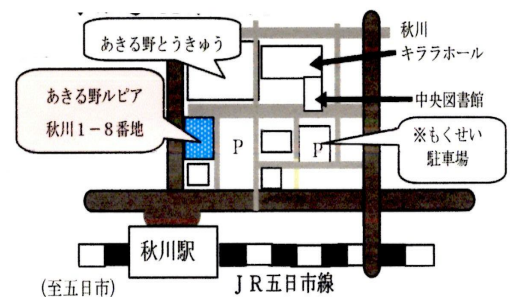
陶山(すやま) 愛嘉さん(あきる野市国際化推進青年の会)

●コーディネーター●

有馬 廣實(ありまひろみ)さん(拓殖大学名誉教授)

●司会●

本庄 美佳さん(拓殖大学非常勤講師)



《駐車場》

会場周辺の駐車場をご利用ください。

駐車券をご提示いただきますと「もくせい駐車場」は
4時間無料、他の駐車場は3時間まで無料です。

<主催> あきる野市教育委員会

<企画・運営> あきる野市生涯学習コーディネーターの会
<https://a-coordinator.main.jp/index.html>



<お問い合わせ>

あきる野市生涯学習推進課生涯学習係
電話 042-558-2438 (直通)